

二〇二五年度

恵泉女学園中学校 第二回 入学試験問題

国語（四五分）（全二〇ページ）

注意 一、開始のチャイムと同時に、問題用紙と解答用紙にそれぞれ受験番号と氏名を記入しなさい。

二、答えはすべて解答用紙に書きなさい。

三、字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。

受験番号
氏 名

一、視覚支援学校に通う中学一年生宇佐美佑は、指導員の塚田さんに励まされながら白杖歩行の訓練に取り組んでいます。ある日の訓練中、地下鉄の駅に降りると人身事故のアナウンスが聞こえてきました。緊張感の中で歩き出した佑は人とぶつかり、相手になじられてしまいます。塚田さんはショックで立ちすくむ佑の肩を抱き、守るようにして地上へと連れ出してくれました。佑と同じく視覚に障害のある幼なじみの双葉も、以前似たような経験をして深く傷つき、学校に来ることができなくなっています。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（本文には、一部改めたところがあります。）

目が見えるって、何だろう？

佑がネットニュースで調べたところによると、Q駅で起きた人身事故はやっぱり自殺だったそうだ。さらに佑がおどろいたのは、事故直後の現場をスマホで撮影しようと、何人ものやじ馬がブルーシートをまくって、救助活動や復旧作業のじゃまをしたということだった。見かねた駅員さんが「お客さまのモラルに問います！」とアナウンスしたのは、鉄道会社として前代未聞のことだったと、その記事には書いてあった。

晴眼者って、何だろう？

目が見える人のこと。さわらなくても、ものの形や材質がわかる人。この世界の大多数をしめる、圧倒的マジョリティー。もし、ぼくの目が見えていたら、何もかもを見なければ気がすまない人間になっていたのかな？ 少しくらい見ることがかなわな

かったり、見てはいけないといわれたりしても、この世界のすみずみまで……だれかの不幸な死まで……徹底的^{てつてい}に見ようとしたのかな？ いっぽうで、目が見えない人とぶつかったときは、気づかなかった自分を反省するのではなく、目が見えないくせに外を歩いていたって、相手をなじったのかな？

⁽¹⁾
 なんか、何ていうか、サイテーだな。

その日も佑がQ駅で起きた人身事故を思いだして、もんもんとしていると、「うっさみーん。うさみんってば！」と、すぐ耳もとで光くんの声がきこえた。

現実にはひきもどされた佑は「えっ。何？」と、あわててききかえした。

「何、じゃないやろ。注文、決まったん？」

そんなふうにいわれて、ようやく周囲の音がもどってきた。揚げ^あものとおでんのダシがまざったような、冬のコンビニ特有のにおいもある。

ふたりは、おでんを買いに来たのだった。

土曜日のお昼時という時間帯のせい、いつもより人の出入りがはげしいようだ。「タラタラタラタラ♪」と、ひっきりなしに入店音が鳴っては、一月の冷たい風といっしょに、お客さんが入ったり出たり出ていたりする。

光くんと何をたのむか相談しながら、しばらくその場でまっていると、ようやく接客がひと段落したらしい。「おまたせしちゃっ

て悪かったね！」と、いつものおじさんがかけつけてくれた。

おでんを買いに来たというと、おじさんは「寒いもんねえ」といって、鍋に残っているおでん種をかたっぱしから教えてくれた。

「そういえば、今日はふたりなんだね。いつもの子はどうしたの？」

光くんが、栗田なら熱を出して寝こんでいると答えると、おじさんはうなつた。

「風邪がはやってるみたいだもんねえ。うちもさ、バイトがふたりも休みでさ、いそがしいのなんのって。で、何にします？」

佑は迷った末、玉子と餅巾着とはんぺんと厚揚げを注文した。

「くりの分も買っていつてやる？」と光くん。

食欲がなくても、おでんなら食べられるかもしれない。

「そうだね。あとで割り勘にしよう」

「ラジャー」

会計をすませると、袋をもったおじさんが、わざわざ店の前の横断歩道までつきそってくれた。

「ダシがたっぷり入ってるから、こぼさないように、ゆっくりね」

「はい！」

ふたりはお礼をいって、ずっしりと重たい袋を受けとった。

白杖の音をコンスタントに響かせながら、光くんがぼそつという。

「あのおじさん、
A
」

「うん」

佑もすなおにうなずいた。それから、考える。

あのおじさんも、乗ろうとしていた電車のダイヤが乱れたり、白杖をもった人とぶつかったりしたら、イラツとするのかな？
晴眼者の全員が悪い人だとは、思わない。それでも、心ない言動を目のあたりになると、晴眼者全体のイメージが悪くなる。

校門をくぐると、「お帰りなさい！」と耳なれた声が出迎えてくれた。陣内さんだ。

「ただいま」

「何を買ってきたんだい？」

「お、で、ん！」

光くんがもったいぶった言い方をすると、陣内さんはくつくつとおかしそうに笑った。

「今日みたいに寒い日に食べるおでんは、さぞかしおいしいだろうね。ちゃんと手を洗ってから食べるんだよ」

「はい！」

陣内さんは、どうだろう？ 松木先生は？ 塚田さんは？ ……佑は、あの日ぎゅつとだきよせてくれた力強い腕を思いだして、
(2)

のどのあたりが痛くなった。

その足で食堂に行くと、一年生用のテーブルで、桜井と矢口がでかい声でしゃべっていた。

「もしかして、おでん？」

においで気づいたようだ。さっそく、矢口にきかれた。

佑が「そう」と答えるや、桜井が悲鳴みたいな声をあげた。

「ずるーい。コンビニに行くって教えてくれたら、お菓子^{かし}のお使いたのんだのにいすかさず、光くんがいかえす。

「はあ？ どうしてオレたちが桜井にお使いをたのまねくぢゃないんだよ」

「買ってきたお菓子を分けてあげるっていったら？」

「そんなときは……行くよ」

「行くんじゃない！」

矢口がツッコむ。

「でもさ、たしか、桜井はダイエットしてるんじゃないか？」

ふと思いだして、佑がそういうと、

「あー、乙女^{おとめ}心がわからないやつ発見」

またしても矢口にいわれてしまった。

「つたく、うるせーなあ。はなれたところで食おうぜ、うさみん」

「うん」

佑は光くんといっしょに席を移動しながら、全然関係のない頭のどこかで、ここは平和だな、と思ってもいた。

少しくらい身体がぶつかっても、だれも文句なんていわない。失敗しても、それどころかまったくできなかったとしても、先生たちは根気強く見守ってくれるし、ていねいに教えてくれる。何かあればかならず手をとって、親切に誘導^{ゆうどう}してくれる。

今までは、それがあたりまえだと思ってきたけれど、そうじゃないのかもしれない。もしかすると、ぼくたちがいる、こっちの世界が特殊^{とくしゅ}なのかも。

じゃあ、どうする？

⁽³⁾ そうではない世界を、ぼくは、これから、どうやって生きていく？

佑は、この平和な世界にいつづけることはできないと、うすうす気づきはじめてもいた。

(中略)

(4) 二学期からスタートした、動物の骨を観察する授業。松木先生がいうには、二学期のあいだに十六種類もの動物の頭蓋骨ずがいこつを観察したそうだ。草食動物もいれば肉食動物もいたし、小型動物もいれば大型動物もいた。

三学期に入った今、観察の対象は全身骨格ぜんしんこつかくとなった。ただし、先週から観察している動物の正体は、今回もまた明かされていない。松木先生は「名前を知ると、それだけで知った気になってしまうでしょう」といって、いつだって、簡単かんたんには教えてくれないのだった。

本日の授業は、松木先生のこんな問いかけからスタートした。

「先週は、背骨を軸じくに身体からだができていることを確認かくにんしました。今日は、胸部と腹部に着目します。どうして、胸部は肋骨ろっこつでおおわれているのでしょうか？」

「心臓があるから」

真っ先に答えた桜井のあとに、

「あと、肺も」

栗田がつけたした。

「つまり心臓と肺は、どういう臓器だといえる？」

「大事な臓器！」

これは、光くんだ。

「じゃあ、その大事な臓器に対して、肋骨はどんな役割をはたしているのかな？」

「守ってる？」

そこでようやく、佑も発言した。

入学当初とくらべたら B に発言しているつもりだけれど、桜井の瞬発力しゅんぱつにはかなわないし、光くんのような堂々っぷりもない。栗田みたいにムダ口をたたく余裕よゆうだってない。ただし、最近は、それが自分のような気がしている。

松木先生は「宇佐美くん、正解！」といった。

「だけどさ、大事な臓器があるのは胸部だけかな？ どうして、腹部は肋骨で守られていないんだろう？」

佑たちはその答えを、骨格標本からさぐることにした。

ふたり一組で観察できるようにと、実験台ごとに一体の骨格標本が用意されている。佑は桜井といっしょだ。

佑が両手をのばしたところで、「宇佐美くんは、すっかり上手に見られるようになったね」と、松木先生の春めいた声がきこえた。そういえば、一学期は片手ばかり見ていたっけ。両手を使うようになったのは、松木先生が口にした「両手を使えば、世界が広がる」の意味がわかったからだ。

ということは、今や、ぼくは、二倍に広がった世界を生きているといえるのかもしれない。いや、ちがうぞ。植物からはじまった

生物の授業は、昆虫^{こんちゅう}、動物の頭蓋骨、動物の全身骨格と、観察の対象がどんどん広がって、この世界に存在している生きものたちの輪郭^{りんかく}をひとつずつなぞってきたも同然だ。中には、「生」だけでなく「死」もあった。

だとしたら、ぼくは、二倍以上に広がった世界を生きているといえるんじゃないのかな？

そんなふうに結論づけるや、佑の心にすがすがしい風が吹きよせた。最近^{しん}は沈^{しず}みがちだった気持ちが晴れわたる。

松木先生はふたつの実験台のあいだに立つと、こんなふうに切りだした。

「そうしたら、全員立って。自分の背骨を、曲げたりそらせたりしてみよう」

松木先生のひと声で、佑たちは椅子^{いす}から立ちあがった。

まずは前屈^{ぜんくつ}して、背中や腰^{こし}が曲がる感覚を味わう。今度は反対側へ、ぐいんと背筋をそらせる。

「もし、腹部にも肋骨が存在していたら、今の動きはどうなる？」

松木先生の質問に、光くんが大きな声で「不可能！」と即答^{そくとう}した。

松木先生は、四足歩行の動物は、空中で背を曲げることで前足と後ろ足を近づけて、背をそらすことで遠ざける、という動作を高速でくりかえすことで、より速く走ることが可能になる、と教えてくれた。

佑は、さっきまでさわっていたなぞの動物Xが、この広い世界をさっそうと走っていく姿をイメージした。

その後、踵^{かかと}の位置や、肘^{ひじ}と膝^{ひざ}の角度、手のひらをどんなふうに地面に接地させているかなど、細部を観察していると、授業終了^{しゅつりよう}の

チャイムが鳴った。

あつというまの二時間だった。

「楽しかったな」

知らず知らずのうちに、笑みまでこぼれていたらしい。松木先生に「宇佐美くん、すっごくいい顔してるよ」といわれてしまった。さわっているのは死んだ動物の骨なのに、その向こうにある臓器や筋肉、はたまた生きていたころの生態を推測するところがおもしろかった。そういう意味では、晴眼者と対等といえるんじゃないだろうか？ 目が見えるからといって、何もかもを見晴るかせるわけではないだろう。佑たちも、じっくりと手でさわることで、見えてくるものがある。イメージすることで、広がっていく世界がある。松木先生に伝えようとしたけれど、きちんと言葉にするのが照れくさかった。

「推測するのがおもしろいから、骨の授業は大好きです。感想は提出用のノートに書きます」

佑が逃げるように早口で話すと、松木先生がおかしそうに笑った。

「楽しみにしています」

春といっても過言ではない、おだやかな声だった。

その日の夜、手で見ることの先に広がっていた世界の魅力みりよくを思いだしながら、生物のノートをまとめていると、ふいに「りんご

の話」を思いだした。それは、こんな話だ。

あるとき、佑が教室に入っていくと、双葉が「ねえねえ！ 知ってる？」と、大発見でもしたみたいな勢いでやってきた。佑が「何だよ。どうしたんだよ？」とききかえすと、双葉はこんなふうに話しはじめたのだった。

「くだもののりんご、あるでしょう？」

「あるけど？」

「りんごは赤いよね？」

「そうだけど。それがどうかしたの？」

「やっぱり、佑くんも知らないんだ！ あのね、りんごが赤いのは皮だけなんだって。皮をむいた向こうにある実は、白いんだって！」

「……………」

佑が何も答えられずにいると、双葉は最後にこういった。

「わたしもびつくりしちゃった。だけど、りんごはりんごだもんね？ 皮が赤くて中身が白くても、その反対でも、りんごはりんご！」

あのとき、そんなふうに笑っていえる双葉を、どんなにたのしく思ったか。どんなにまぶしく感じたか。

佑は、ひさしぶりに双葉に電話を試みようと思いついた。

問一 ⁽¹⁾ なんか、何ていうか、サイテーだな とありますが、このときの佑の気持ちを説明しなさい。

問二 A にあてはまる最もふさわしい言葉を次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア いい人のふりをしてるよな

イ 接客に向いてるよな

ウ ぜったいにいい人だよな

エ きつとばかりしてるよな

問三 ⁽²⁾ 塚田さんは？ ……佑は、あの日ぎゅつとだきよせてくれた力強い腕を思いだして、のどのあたりが痛くなった とあります

が、このときの佑の心情を説明したものとして、最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 塚田さんは優しくしてくれるが、本当は自分たちを重荷に思っていると気づき、裏切られたようで切ない。

イ 晴眼者への不信感がわいてくるが、塚田さんの愛情を疑うことには耐えられず、胸が苦しい。

ウ 塚田さんの行動の裏に隠された晴眼者の優越感を見抜き、怒りがこみあげている。

エ 目の見えない人を心から助けたいと思っている塚田さんの期待に応えられず、もどかしい。

問四 そうではない世界 とは、どのような世界のことですか。説明しなさい。⁽³⁾

問五 二学期からスタートした、動物の骨を観察する授業 とありますが、松木先生は目の見えない生徒たちに対してどのようなねらいでこの授業をしたのですか。説明しなさい。⁽⁴⁾

問六 B にあてはまる最も適切な語を次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 主観的 イ 多角的 ウ 個人的 エ 自発的

問七 ふいに「りんごの話」を思いだした とありますが、このときの佑の心情を説明したものとして最もふさわしいものを次の⁽⁵⁾

ア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 目が見えなくても自信をもって生きていけそうだと勇気がわいている。

イ 目が見えなくても知識さえあればどうにかなると安心していている。

ウ 目が見えなくても好奇心を失ってはいけないと気を引き締めている。^(こゝきしん)

エ 目が見えなくても自分にはよき理解者がいると心強く思っている。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（本文には、一部改めたところがあります。）

ストレスというと、対人関係だけを思い浮かべる人が多いだろうが、もともとは「心に圧迫あつぱくを与えるもの」の総称そうしやうである。酷暑こくしよ、寒冷をはじめとして、騒音そうおん、におい、明るさ、暗さ、痛み、疲労ひろう、心配ごとなどすべてストレスである。ストレスがあると、心が晴れず作業効率も落ちる。心理学では、ストレスの心理的影響えいさきやうをさまざまな方法で測定して調べている。

最近の研究で、ストレスの悪影響の強さに、主観的自由度という要因が関係していることがわかって来た。ストレスに対して主観的自由度が高く能動的な受け止め方をする人は、ストレスの悪影響をあまり受けないですむのだ。

有名な実験がある。「ブーン」という雑音が鳴り続けている部屋で、被験者ひけんに計算作業のような課題をやってもらう。そのとき、半数の人には「雑音が我慢がまんできなければ、このスイッチを押おして止められます。でも、できれば、スイッチを押さないで我慢してやってください」と言った。もう半分の人には、そのような教示をしないでおく。そうすると、「音を止めるスイッチがある」と言われていた人たちのほうが、雑音ストレスによる妨害効果ぼうがいが軽度ですんだという実験結果が出たのである。

雑音を止めるスイッチがあると教えられていた人でも実際にスイッチを押した人はいなかったたので、雑音が聞こえていた点ではどちらも同じである。ところが、スイッチがあると思っていた人たちは、「いま雑音が鳴っているのは、自分が主体的に止めないという選択せんたくをしているからだ。それは、雑音がどうしても止めなければならぬほど不快ではないからだ」という心の動きが起こったの

で、「雑音のうるささ」の認知にんちそのものが軽減され、結果的に、それほどの妨害にならなかったのである。

この実験は、大切なことを教えている。ストレスがあるときに、、心がストレスに蝕むしばまれにくいということである。

この考え方は、心理治療ちりょうなどでもずいぶん応用が試みられている。いやなこと、困難な課題でも、心の持ち方を工夫くふうして主観的自由度を高くすれば、乗り越えやすくなる。

茶の湯には、この主観的自由度を高くする仕組みが豊富にそなわっている。

そのひとつが、気候に対する姿勢である。夏と冬(注)でまえの点前に、暑さ寒さを逆用した習いが多いが、それは決して偶然ぐうぜんではない。ストレスとなる気候に対する主観的自由度を大きくする、先人の知恵ちえと言ってよい。

洗い茶巾ちやきんはもつとも夏らしい心映えこころばの点前だが、クーラーの効いた茶室ではやはりピンと来ないだろう。

晩秋になり、「そろそろ冬だな、いやだな、今年の寒さはどうなのだろうか」と思ったところに、中置の稽古けいこをすると、すぐそこまで来ている冬の気配むかを迎え入れる心境が生まれて来る。

冬の寒さの主観的自由度を考えるときに忘れられないのは、夜咄よばなしの茶事である。冬のストレスは、寒さと夜の暗さ長さにあるわけだが、夜咄は、その冬の寒さ暗さに真正面から挑む形いどで冬を楽しむという魔術まじゆつである。

(注) 点前…茶の湯の作法。

このような具合だから、茶の湯を習っていると、酷暑厳寒を歓迎する気持ちが自然に生まれる。茶室でそういう気構えが養われれば、ふだんの生活でも、暑さ寒さに気持ちが負けにくくなっていくはずである。気候に対する主観的自由度を獲得するからである。

主観的自由度は、もともと、道具の美意識の転換という形で茶の湯のなかに早くから位置を占めていた。

千利休と古田織部の唐物茶入の蓋の窠（虫喰い）をめぐる逸話は、主観的自由度のよい例だと考えている。利休が求めて来た唐物茶入に蓋を作らせたところ、でき上がって来た蓋に窠があった。唐物茶入の蓋は本来無疵であるべきところ、利休はその窠を面白く感じ、織部を招いて茶事を催し、その窠が勝手側になるように蓋を置いた。すると、今度は織部がその茶入を借りて帰り、数日後に利休を招いた。そのとき、織部は窠を客側にしてその茶入を用いたというのである。ここには、凡人なら疵として嫌う窠を景色として積極的に楽しもうという利休の主体性と、その方向を理解し、⁽²⁾ それをもっと推し進めようとする織部の姿を見てとることができる。見事な主体性の発露である。

「園城寺」を祖とする竹花入も、戦陣で花入がないという不便から生まれた物である。けれどもそのデザインには、自由でのびやかな心が表わされていると言う。不足をたんなる不足と捉えず、創作の好機と主体的に捉え、楽しんだ心境がうかがえる。

考えてみると、そもそも「侘び」という美意識が、⁽³⁾ 非常に強い主体性の主張を軸脈にしている。対称的でひたすら端正な天目や青磁壺を美とする美観から、非対称でくすんだ和物を美とする美観を区別して「侘び」と言うわけであるが、それは、「一目見れば

（注）勝手側…客とは反対の方向。

そこに宿っている美」の美観から、「見て、心で切り取り、主体的に見つけなければ見つからない美」の美観への転換とみることが
 できるわけである。「花をのみ待つらむ人に山里の雪間の草の春を見せばや」（藤原家隆）という利休の愛誦^{あいしょう}がさりげない言葉でドキ
 リとするほどの主体性を謳^{うた}っているのに気づきたい。現代心理学が発見した「主観的自由度」を名づけることなく体现している。

（岡本浩一『心理学者の茶道発見』より）

問一

A

にあてはまる最も適切なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 主観的自由度はないが、ストレスに耐性^{たいせい}があり、自然に受け入れられる人は
- イ ストレスを肯定的に受け止め、主観的自由度にとらわれず、自らの認識を改められる人は
- ウ ストレスを主体的に、すなわち、高い主観的自由度のもとで、積極的に受け止められる人は
- エ 主観的自由度が低く、ストレスを積極的に受け入れ、あきらめの気持ちを持てる人は

問二

⁽¹⁾暑さ寒さを逆用した習いとはどのようなものですか。解答欄^{くわん}に合うように、二〇字程度で説明しなさい。

問三 それ⁽²⁾は何を指していますか。最も適切なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 唐物茶入の蓋に本来あつてはならないはずの疵があるのを、千利休が面白がつて茶事で用いるという美意識の転換。

イ 唐物茶入の蓋に本来あつてはならないはずの疵があるのを、千利休が織部から見えないように用いる気遣い。

ウ 唐物茶入の蓋に本来あつてはならないはずの疵があるのを、千利休がわざと織部にも見えるように置いた、その大胆さ。

エ 唐物茶入の蓋に本来あつてはならないはずの疵があるのに、千利休が茶事に用いた意味を理解し、借りて帰った織部の機

転。

問四 竹花入の例においては、どのようなことがストレスなのか。文中から一三字で抜き出しなさい。

問五 非常に強い主体性⁽³⁾とはどのような態度ですか。「ストレス」という語を用いて説明しなさい。

問六 「花をのみ待つらむ人に山里の雪間の草の春を見せばや」の和歌の中から、X「一目見ればそこに宿っている美」とY「見て、心で切り取り、主体的に見つけなければ見つからない美」にあたるものを抜き出しなさい。

三、次の①～⑤の文のカタカナを漢字に改めなさい。

- ① 増水した川に近づかないようにケイコクする。
- ② 総理大臣をゴエイする。
- ③ 初めて野鳥の声のサイロクに成功した。
- ④ おたがいの作品をヒヒヨウする。
- ⑤ 桜のつぼみが目にトまる。